

離脱者

大島 行雲

Mは退職した。

入庁して三年、すっかり仕事も覚えて若手の戦力の中でも期待されていたMの退職は、傍から見れば不思議でならなかった。Mは職場の人間関係で何の問題も起こしてはいない。上司とも先輩とも楽しげに飲みに行ったりしていた。仕事自体で言えば尚更、未熟ゆえの失敗はあったものの、非常識な事は何一つとしてせず、同じ過ちを繰り返さなければかりか、旧習打破の事務改善にまで手をつける積極さまで持ち合わせていた。どんな事態にも挫ける事ない強い精神と、残業続きの繁忙期にも壊れない強い身体で、安定した実力を発揮してくれていた。

一身上の理由。退職願には、使い古された理由にならない理由が書かれていただけだった。上司はMに事情を聞き、優秀な部下の慰留に努めたが、Mは沈黙して多くを語ろうとはしなかった。Mは送別会の席でも微笑して皆に礼を言うばかりで、退職の真意を語る事はなかった。

仕事への不満が原因ではない。職場の人間関係が原因ではない。健康上の問題が原因ではない。

やりたい事があるから。

Mを育ててきた先輩職員の詰問に、漸く語った言葉はそれだ

け。だが、何をやりたいかは言わない。それができるかどうか分からないから、今は言いたくないと。決意は以前から既に固まっていたのか、担当の仕事は完璧なまでにマニュアル等が整備され、いつでも引継ぎができる態勢になっていた。思いつき突発的行動ではなかった。この就職難の時代に仕事を辞めてまで、やりたい事とは何か。司法試験か、音楽活動か、冒険旅行か。

それ以上、何一つ語らぬまま、Mは職場から消えた。心配した先輩が後日、自宅に電話すると、電話は通じなくなっていた。いつの間にか引越していったのだ。転居先は分からない。仲間でMの消息と、退職の理由が喧しく話題にされた。

職場の誰かと不倫でもしていたのか。実は横領をして逃げているのか。どれも根拠のない興味本位の噂だった。いつしか、話題は別のものへと移り、Mの事を語る者はいなくなつた。

その頃、Mは誰にも教えていない新居で、黙々と身体を鍛えていた。図書館やインターネット・カフェで様々な情報を収集した。

Mは自分の決意を強固にしていた。

仕事への不満、職場の人間関係、そんなものはMにとって大事の前の小事だった。世界の悲鳴がMの鼓膜を突き破らんかの勢いで、脳髄に雪崩れ込んでいたからだ。

中東では民族と宗教が、信仰という名の下で不寛容と暴力に

よって人々を支配していた。この国では、能無しの政治家と役人が中身の無い言葉を弄び、民衆は一時の享楽で目を瞑る。赤子が床に叩きつけられ、夫が妻に毒殺され、道端で無差別に通行人が刺し殺される。

人間じゃない。人々は叫んだ。

人間だからさ。Mは呟いた。

自分達が人間である事、それが問題だった。それが原因だった。めだかがいなくなつた。雀が少なくなつた。農薬塗れの野菜を食べている。牛の脳味噌がスポンジ状になって、泥酔したサラリーマンの様にまともに歩く事もできない。脳味噌がスポンジ状になって、まともに歩けないのは人類だ。

怒りを抑えて生きてきた。忍耐に忍耐を重ねて働いてきた。だが、もう限界だった。乳児が強姦された。結婚式が爆撃された。また、国会議員が収賄で逮捕された。法律も条例も整備されていくのに、世の中は一向に良くならないどころか悪くなるばかりだ。社会の中から、法規に乗って、内から改善していく希望は失われた。

うわ言の如く口にされる改革という言葉は、何一つ変えられぬまま色褪せていく。誰もが総論に賛成し、誰も各論に反対する。本当に世の中を変えようという気持ちなどあるのか。自分の周りの狭い世界は確かに平穏で、毎日、同じ事が繰り返されてゆく。その奥底で、毎日、同じ過ちが繰り返されてゆく。

ゆっくりと、徐々に社会の首が締められてゆく。気の狂いそうな窒息感。

この国の国民である事、この社会の構成員である事、この地球の人間である事、それがMは嫌だった。嫌で堪らなかった。どんなに嫌っても、自分は人間だった。皆と同じ人間だった。朝、尿意を催した。通勤電車の中、睡魔に襲われた。仕事中、空腹を感じた。Mは人間だった。間違いなく人間だった。

それが嫌だった。

核爆弾、サリン、ミサイル、ナイフ、時限爆弾、賄賂、ストーカー、不倫、民族浄化、国境紛争、宗教、神、権力、盗聴、コンピューターウイルス、革命、カストロ、共産党、イスラム原理主義、ナシヨナリズム、グローバリズム、資本主義、自由主義、死刑制度、少年犯罪、風俗業、人身売買、革命。

内側からは変えられない。

我慢ならない。

守るべき法律はない。安住すべき社会はない。

生活感のない部屋。汚れた窓ガラス。傷だらけのフローリングの床に齧りかけの林檎が転がり落ちている。Mは、それを裸足の指で弄び、部屋の隅へと蹴り飛ばす。

眼に優しさはない。死んだ様な鬼火の如き眼光が、裸電球の下で蒼く過ぎる。押し殺した吐息が、噛みあわせた歯の隙間から漏れ出す。何も無い空間に静電気が走る。肩で大きく息をし

た。

我慢ならない窒息感。

誰にも言わず許可を取って、地道に練習してきたライフル銃
を手に取り、鏡の前で構えた。

銃口を鏡の向こうの自分に向けた。

引き金に指をかける。